

マタイの福音書 第20章 28節

「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

もう既に初夏の風、暑さを感じる頃となった。水が欲しい季節となっている。大地は穀物の成長を支え、庭の花々は咲いて見る者の気持ちを和ませ、流れる水は人々の喉を潤す。このように視点を変えてみると、大地、花々、水、あらゆる自然の風物は互いに仕えるためにあるように見えてくる。決して自己主張することなく、置かれたところで持ち味を生かし、すべてをもって仕える姿が自然だ。それで、天地万物が調和を保ち、見る者に季節の移ろいを楽しませる。

見る者もそうありたい。それが正しいからとか、常識だとか、有益だからではない。これ等を否定するものではないが、互いに仕え合うのは、正しさ、常識、有益を根拠とするものではない。根拠は人の子がそうしたからである。人の子が遣わされたのは地上において父なる神に仕えるためである。そして、多くの人のための贖いの代価として、いのちをささげるためである。父なる神に仕え、そして自分のいのちを人々に与える。仕えることが、人の子が現わした人の生き方である。貪り、強奪し、野心を肥大化する世に現わすただひとつの道、仕える道である。

2023年5月18日